

内山永久寺の扁額

1 はじめに

このたび、天理市内の民家が所蔵する扁額について、調査の依頼を受けた。同家では内山永久寺旧蔵と伝承し、木箱に入れて大切に保管してきたものである。

内山永久寺は、平安時代院政期に興福寺の頼実・尋範が建立した寺院であり、江戸時代にも900余石を領する、大和国屈指の大寺院だった。しかし明治維新時の廃仏毀釈によって廃寺となり、伝来の品々は四散してしまった。近年、残存資料を収拾・検討する試みもおこなわれているが（東博1994）、その実態は不明な点が多い。

この扁額については、旧版の『天理市史』（天理市1958）の638頁に写真が掲載されている。しかしそれ以上の言及は一切ない。そこで今回、奈良文化財研究所で総合的な調査を実施した。その結果、この扁額は弘誓院流の祖の書家である藤原教家が、宝治元年（1247）9月に筆を執り、内山永久寺の真言堂に掲げられた扁額だと推定するに至った。よってここに報告する。

2 文字・史料の検討

概要 扁額のオモテは巻頭図版3を、背面は図17を参照。背面には塗装がよく残るが、オモテは風化が激しく、外気の影響を受けやすい位置に長年掲げられていたことを窺わせる。それでも、装飾・塗装の痕跡を留めている。作りは丁寧で、形状の特徴から中世以前に遡ると考えられる（3節参照）。また、年輪年代測定の結果、辺材を含む部材で、1218年+ α という年代を得た（5節参照）。そこで2節でまず、扁額の文字・文献史料等の面からこの扁額の意義を論じる。意匠・年輪年代等の詳細は、3節以下を参照されたい。

文字 額面は文字の輪郭を墨描きした籠字で「金剛乗院」と記し、額面全面を白色塗としている（図18。4字分の字高は41.7cm）。ただし籠字内の白色塗部を見ると、白色塗料を運筆に沿って刷毛塗りしている部分がある（特に「金剛乗」字）。つまり、まず籠字内を白色塗料で刷毛塗りし、その後に新しい白色を、額面一面に塗り直した。現状はその新しい白色が剥落して、古い刷毛塗りの



図17 扁額背面

白色塗料が顔を出している状態と考えられる。

また、籠字の墨線には書き替えも確認できる。「乗」字の墨線の外側には、もう一本の墨線の痕跡が確認でき、それは新しい白色塗料によって消されている（図20）。

以上から、額面は後世に補修されていると思われる。文字はなぞり直されているが、少し字形は変化している。

史料 永久寺の額字は、額字を集めた史料集、「扁額集」に見えている。同書は南北朝頃には成立していたと考えられる史料で、その巻2は藤原教家筆の扁額の集成である（中田1981）。そこに永久寺の額字が2点存在する。写真を陽明文庫本から掲げておく（図19①②。中田1981より転載。同書によれば①②とも字高40.5cm）。また同書には添書があるので、宮内庁書陵部本によって下記に示す（陽明文庫本は一部脱文あり）。

① 金剛乗院 南都内山真言堂額云々。彼山寺堂、永久寺云々。宝治元年九月、用之。

② 金剛乗院 内山額。宝治元年九月、不用之。

これによれば、①を真言堂の額に用い、②は用いなかったという。実際、字形を比較すれば明らかに、現存扁額と①が類似する。ただし①も、「乗」字や「院」のこごとへんなどには相違がある。しかし「扁額集」と扁額とは、藤原教家の書をそれぞれ別個に写したはずである。また現存扁額には後世の補修もあるので、多少の相違は起こりうるだろう。一方、鎌倉後期に成立した「内山永久寺置文」（以下「置文」と略す。東博1994参照）の真言堂（藤原教家）の項には、「額弘誓院大納言入道所書也」とある。さらに、1218年+ α という年輪年代を勘案すれば、宝治元年（1247）に藤原教家が書いた真言堂の額だという「扁額集」の所



図18 扁額の額字



図19 「扁額集」の字

伝は、充分信頼できると言えよう。

なお、江戸後期に松平定信が編纂した「集古十種」扁額2にも、「金剛乗院」額が見える。その筆跡は基本的には①に近いが、「金」字は②に近い。また藤原行成筆とする。「集古十種」がどのように史料を集めたのか、注意される点である。

伝 来 明治初年に永久寺は廃寺となる。寺物は急速に散逸するが、明治7年(1874)・明治9年(1876)に地元の内山が作成した文書には、旧内山永久寺の宝物として、「金剛乗院額 後鳥羽院御宸筆」などが挙がっている(東博1994)。これらは「旧伽藍之内」に秘蔵されてきたが、明治8年(1875)に払下げになったという。扁額を所蔵する民家は永久寺の子院、福寿院の里元だったとのことである。宝物の中でも、寺院を象徴する扁額のみは、地元の関係者が保管したのだろう。(吉川 聡)

3 扁額の形態と意匠

先行研究 室町時代以前の縦型の扁額の形態および意匠については、奈文研2010の研究があるので、この論稿の視点に基づき、本扁額の特徴について考察したい。用語もこの論稿に倣う。なおこの論稿では室町以前の扁額を51点挙げており、当扁額が宝治元年(1247)のものならば、その中で17番目に古いものに位置づけられる。

全体の形態と意匠 伝内山永久寺所蔵の扁額は、高さ84.0cm、幅43.3cm、額面厚2.8cmで、額字が施される額面に対して額縁が立体的に取り付く。左右の額縁から下方へ脚状の突出部を持ち、上辺の肩状の突出部は持たない。奈文研2010の成果と照らし合わせると、この扁額の形態



図20 「乗」字部分

は平安以降にみられる特徴で、宝治元年とみても年代的に齟齬はない。額面と額縁は、背面側で鉄製の角釘により止められている。内枠は隅を突付けとし、上下の枠が延びており、四隅で額面に竹釘脳天打止めとする(図21)。表面は表裏とも非常に平滑だが、ヤリガン

ナの痕跡はみられない。

額 面 現状、額面は錆下地塗、黒色塗装の上に、白色塗装を施す。「金剛乗院」の額字は外郭線を墨で描き起こすのみで、陰刻や薬研彫などの彫刻は施さない。2節で述べたように、文字内部には刷毛塗りした白色塗装が確認できる。この点を鑑みると、当初は地が黒色塗で文字が白色塗であった可能性がある。背面は額縁と同じ仕様で、施工工程は切粉下地塗、錆下地塗、黒漆塗としており、同時代の仕事とみられる。

背面の額面上辺左右と脚部の付け根の左右に、懸額のための金具を付ける(図17)。上辺の金具は径0.5cm、長さ16.7cmのL字形の打掛金具、下方の金具は径1.0cm、長さ7.8cmの両端円環形の一文字金具で、双方とも金具元を扁額に打ち込んだ壺金具と連結する(図17・図22)。

内枠は錆下地塗、黒漆塗とし、その上に白色塗料で雷文つなぎを描き起こす。内枠の額面側側面に白色塗料、額縁側側面に緑色塗料が付着しており、これらの塗装が内枠の取り付け後であることがわかる。

なお、黒漆塗については今回材料分析をおこなっておらず、目視観察からの判断による。

額 縁 額縁は規則的な花先形の線形、猪目をもつ。前述のように額縁と額面は鉄製の角釘と壺金物で打付けられている。上下の材と左右の材の取付き部分では、背面側の隅部分を別材で埋めている(図22)。

脚状部は、左右ともに下端より9.0cmの位置で平柄、竹釘留めで継いでいる。向かって右手の先端部は割損により、別材で補修をしている(図23)。奈文研2010では扁額の脚部の割損が多くみられることについて、斜めに懸



図21 内枠の取付き・猪目・宝相華

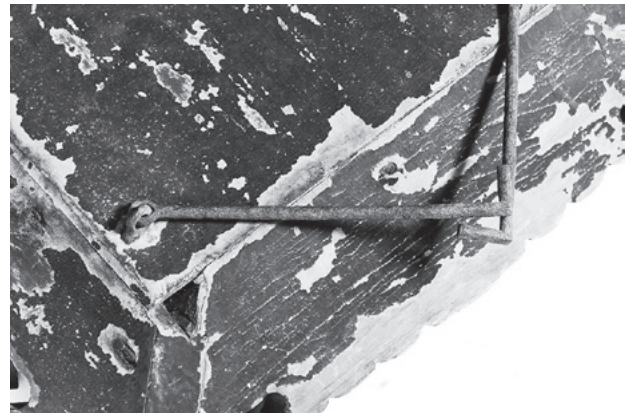


図22 打掛金具の取付き状態



図23 額縁脚状部詳細

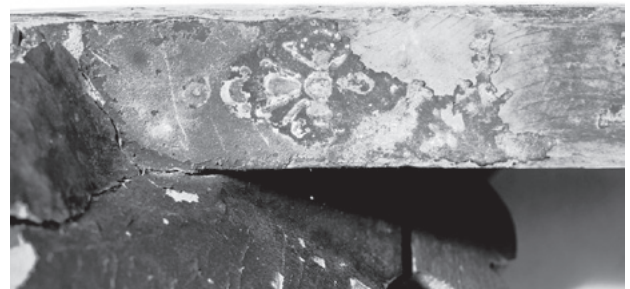


図24 額縁脚状部木口面の花菱文彩色

表2 XRF分析の結果一覧

測定箇所の特徴	検出元素						
	K	Ca	Fe	Zn	Cu	Hg	Pb
木質部		(+)	(+)	(+)	(+)		(+)
緑色を呈した物質			(+)	(+)			(+)
黒色を呈した物質	(+)	(+)	(+)		(+)		(+)
白色を呈した物質			(+)				+
表層が剥離した白色部			(+)				+
雷文様の白色部			(+)				+
背面の黒色部			(+)				
背面の白色部（黒色物質の剥離部）			(+)				
背面の緑色部			(+)		+		(+)
背面の赤色部			(+)		(+)	+	(+)

+ は特徴的に検出した元素 (+)はその他の検出元素

額した場合、脚先端部に木材の繊維方向と平行な向きに剪断応力が生じるためと推測している。左手の柂目板材が割損していない点はやや疑問が残るが、本扁額の割損も同様の理由と考えられる。

塗装は額面と比較すると、剥落が大きい。全体を黒漆塗とし、その上に宝相華とみられる塗装（白色・緑色・赤色）の痕跡が認められる。なお背面の黒漆塗は、脚状部の先端部分にも確認できるが、割損部分や下方の額縁の破損部分には確認できない。また脚状部分の側面には黒漆塗の上に花菱文を描き起こす（図24）。

（鈴木智大・海野 聡）

4 塗料及び色料の材質分析

扁額の塗料と色料について蛍光エックス線分析（XRF）、紫外可視分光分析（VIS）、近赤外分光分析（NIR）を用いて材質の検討をおこなった。白色は額面の全面と文字内の刷毛塗り部・内枠雷文部で測定した。その結果、どの測定位置からも鉛白（ $(\text{PbCO}_3)_2\text{Pb}(\text{OH})_2$ ）が検出され、白土や胡粉は検出されなかった。この点は扁額製作年

を宝治元年（1247）とする文献史料の記載と矛盾しない。黒色は背面・脚状部で測定した。色料は不明だが、墨などの有機性材料の可能性が考えられた。緑色は上端部・脚状部宝相華で測定した。その結果、銅が検出されたが可視分光分析ではいわゆる天然岩絵具（孔雀石）とは符合しなかったため、ここでは銅系緑色顔料と呼ぶに留めたい。赤色は脚状部花菱文の箇所でも測定した。水銀と鉛が検出され、可視分光分析の結果、水銀朱（辰砂）に酷似したデータが得られた（表2）。鉛については鉛白下塗に由来している可能性がある。（赤田昌倫）

5 年輪年代調査

調査対象の扁額はヒノキと思われる針葉樹材製で、左額縁に露出する柂目面を観察すると年輪100層以上を数え、かつ目のつんだ良材であることから年輪年代測定調査をおこなった。調査に際してはデジタル一眼レフカメラを用いて対象部材を撮影し、取得した年輪計測用画像を専用ソフトで計測する方法を採用した。左額縁の3ヵ所で計測をおこない（図25）、それぞれ、141層、137層、148層の年輪が計測でき、さらに各計測部位の外部には摩損等で計測できない層がそれぞれ19層、11層、10層存在する。

この計測データを光谷拓実が作成したヒノキの暦年標準パターンと比較照合した結果、計測線Aが1198年で照合が成立し、t値は6.4であった。同様に、計測線Bでは1207年・t値6.2で照合が成立、計測線Cでも1207年・t

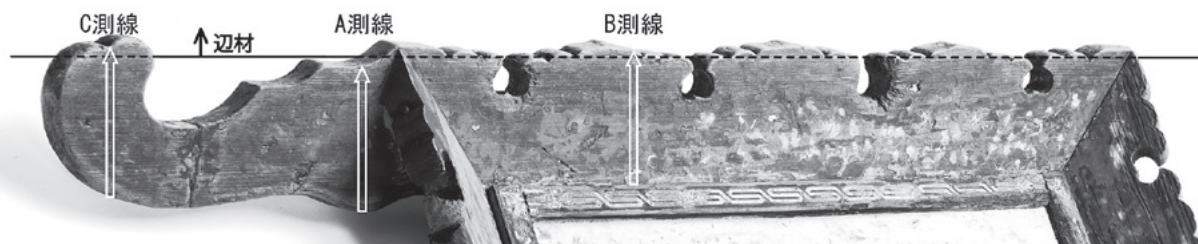


図25 年輪計測位置と辺材

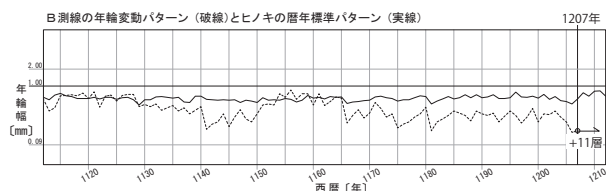


図26 年輪パターングラフ

値6.4で照合が成立した。

これらの年代値にそれぞれ計測できなかった層数を加えると、計測線Aの最外層の年輪年代は1207年、計測線Bは1218年、計測線Cは1217年となる。ここでは計測線Bと暦年標準パターンのグラフを掲示する（図26）。なお、計測線AとCのクロスデーティングをおこなったところ照合が成立し、年輪変動パターンをグラフ化し目視で観察しても著しい相関性が認められることから、両者の所用材の原木は同一であると認められる。

また、計測線B・Cの最外層付近では色調の薄い部位が幅1.0cm程の帯状に認められ、この部位は他の部位と比べて傷みが進んでいることから辺材と思われる。したがって、本扁額所用材の原木は計測線Bの最外層の年輪年代、1218年に切除された辺材分を加えた年に伐採されたことになる。

ここでこの切除分について推測を加えるならば、樹齢300年ほどの木曾産ヒノキの辺材幅が約3.0cm程であることを考慮すると、本扁額所用材から制作時に切除された辺材幅は約2.0cmと見積もることができる。今回の計測線Bにおいて辺材と思われる約1.0cm幅の部位には15層の年輪が観察されるため、切除された約2.0cmの辺材には概算で約30年分の年輪が含まれていたと計算される。以上より、本扁額所用材の伐採年は最外層の年輪年代、1218年に30年を加えた宝治2年（1248）前後と推測される。この年代値はあくまでも概算による推定値であるが、先に史料の検討によって得られた宝治元年（1247）制作とする解釈を裏付けるものと言えよう。（児島大輔）

6 まとめ

以上から、この扁額は宝治元年（1247）9月に藤原教家が筆を執り、永久寺の真言堂に掲げられた扁額と考えられる。永久寺の遺品として、また、鎌倉時代扁額の実例として、数少ない貴重な資料である。

文献史の面からは、永久寺の性格に関わる問題も生じる。近世の「内山永久寺縁起」によると、伽藍建立の際には鳥羽天皇が保延元年（1135）に勅して、「常に金剛最上乘の秘法を修し長く国家の安全宝祚の延長を祈り申せとて、金剛乗院の勅額を賜ふ」とある（東博1994）。この点、「金剛乗」とは真言密教を意味し、真言堂の扁額として相応しい。また真言堂は保延2年（1136）の建立で、永久寺で最古の堂舎である。そのためか、近世には金剛乗院とは、永久寺の院号と認識されている。しかし、永久寺の本堂は別にあり、保延4年（1138）建立・建保7年（1219）再建で、丈六の阿弥陀を安置し、丈六堂とも呼ばれていた。永久寺とその堂舎の性格について課題を投げかけている。

建築史の面からは、真言堂の変遷にも関わってくる。真言堂は保延2年（1136）の建立の後、建久2年（1191）に大きな修理があったと伝わる（「内山永久寺縁起」）。その後、「内山永久寺真言堂指図」が記される江戸時代初期に至るまで火災による焼失などの記事がみられない。指図によれば、真言堂は方7間、8尺等間で、正面に向拝が付く。内陣の梁行方向の柱筋が通らず、桁行方向の柱筋が通る。こうした特徴からみて、真言堂は、中世のある時期に再建された、もしくは大幅な修理を受けたと推測される。ならば、本扁額が真言堂の再建あるいは大幅な改修を受けて記された可能性も考えられる。この点、建長5年（1253）に、真言堂の「仏後障子灌頂十二天并裏四天」が描かれている（「置文」・「内山之記」）ことと関連づけて考えることもできるかもしれない。

なお扁額が架けられた場所としては、向拝部分、外陣正面、内外陣境を想定することができよう。

（吉川 聡・鈴木智大・海野 聡）

謝辞

彩色調査には窪寺茂氏（建築装飾技術史研究所）、蛍光エックス線分析には柳田明進氏（京都大学大学院）、年輪年代調査には光谷拓実氏（客員研究員）のご教示とご協力をいただいた。深く御礼申し上げたい。

参考文献

東京国立博物館『内山永久寺置文』史料篇・研究篇、1994。
天理市史編纂委員会『天理市史』1958。
中田勇次郎編『扁額』世界聖典刊行協会発行、1981。
奈良文化財研究所『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究2木部』2010。
山岸常人・藤井恵介「内山永久寺伽藍図及び真言堂指図等について」『建築史学』14号、1990。